

- ・ 卒業時アンケート等をDPとの対応関係が明確なものとして再構築した。
- ・ 理系学部と文系学部を事例に、DPの達成状況とされる値の課題を明らかにした。

【大学教育研究センター R5年度 部門別課題の成果概要】



大学教育研究部門

【課題①】 多文化理解共修のためのケース教材開発

R5年度計画：多様な授業で本教材を活用し、学生や教職員からのフィードバックを得て内容の改訂を行うとともに、活用方法のグッドプラクティスを抽出する。

R5年度成果：ケース教材の活用状況についてまとめ、日本教育工学会の研究会で発表した。ケース教材の一部を動画化した。新ケースを1本追加した。

【課題②】 大学院生に求められる教育スキルに関する実践研究

R5年度計画：博士支援推進室との協力体制のもとに大学院生へのキャリア支援を強化する。

R5年度成果：予習動画等を活用して、プログラムの充実を図った。「大学教員準備講座」を博士支援推進室の行事として正式に位置づけ、大学教育研究センターは実質的な内容・運営を担当する仕組みを構築した。「大学教員インターンシップ」の受け入れ大学を1校増やした。

【課題③】 学生の深い学びを促す教育学習支援コンテンツの開発

R5年度計画：新任教員FD研修コンテンツの開発と普及、ハイブリッド授業に関わる教育支援（FD）コンテンツの開発とセミナーを開催する。

R5年度成果：全学FD研修会「ハイブリッド型授業設計のためのポイント」を実施した。

【大学教育研究センター R5年度 部門別課題の成果概要】



教学IR研究部門

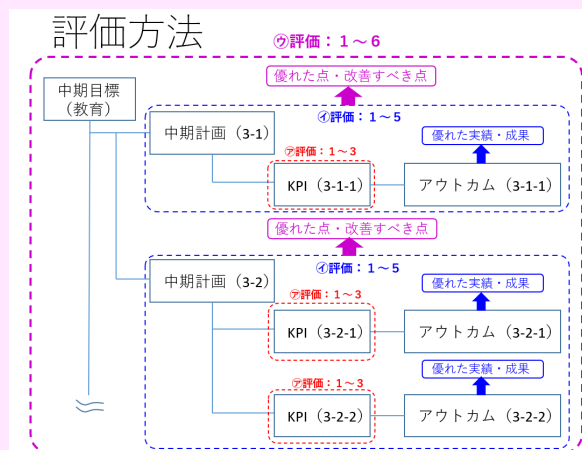
【課題】 教学IRの中核となる「教学IR推進室」のあり方についての提言

R5年度計画：教学IR関係者を対象として、他大学の教学IR担当者から、その実情にふみこんで情報提供いただく機会を設ける。また、実際にデータウェアハウス（KDWH）に格納されたデータ等を分析するプロセスを通じて、教学IR推進体制について具体的に検討する。

R5年度成果：KDWHに格納されたデータと同等のデータを実際に分析し、そのプロセスにおける課題を明らかにした。

【追加課題】 第4期中期計画の成果指標の提案

R5年度成果：本課題は当センターのミッションの範疇にはないが、教育担当理事の命により、第4期中期計画の成果指標案を作成した。本課題を通して、教学IR推進室のミッションのあり方を考える機会となった。



【大学教育研究センター R5年度 実施事業概要】



大学教員準備講座（プレFDプログラム）

大学教員を目指す神戸大学博士後期課程学生を対象とした研修会

- ・ 日時：2023年8月22日（火）～23日（水）
- ・ 内容：講義（授業方法等）＋演習（シラバス作成等）＋実習（模擬講義等）
- ・ 参加者23名（12研究科）＋SPRING（次世代卓越）プロジェクトとの連携

大学教員インターンシップ

- ・ 目的：大学教員の職務の多様性について理解を深め、大学教員をめざす上での意欲や心構えを醸成する
- ・ 対象：大学教員準備講座を修了した大学院生4名（国際文化、国際協力、医学、保健学）
- ・ 日時：2023年10月～12月
- ・ 受け入れ機関：大阪観光大学、神戸学院大学、湊川短期大学
- ・ インターンシップ内容：授業見学、行事参加、模擬授業、学生へのアドバイスなど

紀要の編集・発行の実務担当

「大学教育研究」第32号 2024年3月31日発行

〔特集〕「教養教育のあり方を考える」：特集号論文 4件

〔論稿〕一般論文 12件



令和5年度 計画

- ・他の主要大学において全学教育の目標とその実施体制（カリキュラムや教育部会等）の関係性を調査し、その特徴と課題を把握して神戸大学への知見を得る。
- ・神戸大学における旧教養部以来の教養科目の編成方法と課題を歴史的に検証し、2025年度からの教養教育改革に知見を得る。

令和5年度 成果

- ・日本の学士課程教育におけるコア・カリキュラムの理念と構成原理について検証し、その特質を明らかにした。教養部解体以後、神戸大学を含む日本の主要大学では、教養教育を学問分野別科目から主題別科目に再編した経緯があることを明らかにした。
- ・コア・カリキュラムの編成原理は、特定の科目群を選択必修とする「領域コア方式」と特定科目を全員が必修とする「科目コア方式」があり、神戸大学ではこれまで「領域コア方式」をとってきた。近年では基礎的・導入的科目において「科目コア方式」をとる事例を確認できた。

今後の課題

- ・全学教育カリキュラムを実施・運営するのに適切な組織体制（教育部会の仕組み等）について調べる必要がある。
- ・国内他大学の学士課程教育におけるコアカリキュラムの運営上の課題について把握する（令和6年度国立大学教養教育実施組織会議（2024年5月25日）において、コア・カリキュラムに関する分科会を開催予定）。

成果物 ／参考資料

- 【論文】近田政博（2024）「学士課程教育における教養科目のコア・カリキュラムーその特質と課題ー」神戸大学大学教育推進機構編『大学教育研究』第32号、pp.13-32.
- 【資料】近田政博（2024）「神戸大学における2学期クォーター制：導入のねらいとその成果や課題」千葉大学シンポジウム「ターム制の効用と問題点 メリハリをつけた学期制の可能性」（2024年1月17日）

【大学教育研究センター 重点課題②】 教育の質保証のための学修成果のアセスメントに関する研究



令和5年度 計画	学修成果の可視化という観点から、卒業時アンケート等をDPとの対応関係が明確なものとして再構築する。また、学修成果の可視化機能を有するLAViSの実用可能性を高めるため、先行大学への調査を行うとともに、LAViSにおいてDPの達成状況とされる値をできるだけ信頼できる値とすべく、特定の学部・学科を事例に検討を行う。
令和5年度 成果	・従来の「卒業時アンケート」と「学修の記録」は、全学DPに対応した項目ではなかったため、全学DPに対応した項目を提案するとともに、特に「卒業時アンケート」には、学部DPに対応する項目を新たに設ける提案をし、それらの提案が採用され、実運用された。 ・DPの達成状況とされる値の課題を見定めるべく、特定の科目群の成績に基づく直接評価と学生アンケートに基づく間接評価の関係性についての検討を、理系A学部α学科と文系B学部β学科を事例として行った。
今後の課題	・LAViSの仕様を前提とした形での実用可能性は難しく、有効活用の見込みすらみえていない。LAViSとは異なる形で、学修成果の可視化機能を有する仕組みを検討する必要がある。
成果物 ／参考資料	【資料】全学評価・FD委員会資料（2023.9.21）「卒業・修了時アンケート全学共通項目（修正案）」等 【論文】葛城浩一（2024）「ディプロマ・ポリシーで定める能力をどのように評価するかー直接評価と間接評価の関係性に着目して」神戸大学大学教育推進機構編『大学教育研究』第32号、pp.61-80. 【資料】村上正行「大阪大学における教育・学習データの活用・学習成果の可視化に関する取組の現状」

令和5年度
計画

- ・神戸大学内の多様な授業で本教材を活用し、学生や教職員からのフィードバックを得て内容の改訂を行うとともに、活用方法のグッドプラクティスを抽出する。

令和5年度
成果

- ・日本教育工学会研究会において発表「多様性理解促進のための共修ケース教材の開発と試行」を行った（2023年9月13日）。同教材集の作成過程を振り返るとともに、同教材が学生の学びに与える影響を質的に検証し、活用上の課題と可能性について一定の知見を得られた。
- ・ケース教材集『ともに学び、ともに歩む一ケースで学ぶ多文化間共修（大学編）』における「ケース1：This beautiful blond lady is from …」の動画教材を作成した。学生の協力を得て、2023年7月25日にグローバル教育センターにて撮影を行った。
- ・チーム内で意見交換しながら、新ケース「言えない想い、言えない辛さ」を作成した。学生間の日常的な会話のなかにセクシャル・マイノリティの問題を取り上げた。

今後の課題

- ・上記動画の編集作業を進め、授業やFD等における教材として活用し、グッド・プラクティスを蓄積する。
- ・教材作成のシーズ段階を終了し、今後は実践段階に入るため、2024年度からは大学教育研究部門の課題としては終了する。

成果物
／参考資料

【研究会発表】黒田千晴・大山牧子・近田政博・永井敦・朴秀娟・村山かなえ（2023）「多様性理解促進のための共修ケース教材の開発と試行」日本教育工学会研究報告集, 3号、pp. 196-203.
【書籍】近田政博（2024）『改訂版 学びのティップス 大学で鍛える思考法』玉川大学出版部

令和5年度 計画	・博士支援推進室と協力してプレFD「大学教員準備講座」を開催し、両組織の強みを活かして、大学院生の教育スキル習得とアカデミックキャリア支援を強化する。 ・神戸大学の大学院生へのキャリア支援体制の中に「大学教員インターンシップ」を位置づけるため、博士支援推進室との協力体制を構築する。 ・「大学教員インターンシップ」の受け入れ先を拡充し、大学院生がより多様な機関、受け入れ教員のもとで研修を受けられるようにする。
令和5年度 成果	・プレFD「大学教員準備講座」を2日間にわたり開催した（2023年8月22日、23日）。13の研究科から23名の大学院生が参加した。最終日に模擬授業を行い、博士支援推進室長名義で修了証を授与した。 ・2023年度「大学教員インターンシップ」に4名の大学院生（国際文化学、国際協力、医学、保健学）が参加し、大阪観光大学、神戸学院大学、湊川短期大学において、受入教員から指導・助言を受けた。 ・同インターンシップの受け入れ教員として大阪観光大学の外国人教員が加わったことで、留学生が参加する場合の支援体制を強化した。
今後の課題	・プレFDプログラムについては、①到達目標（獲得する能力）を明確にする、②モデルとなるシラバスを用意する、③終了後の茶話会などを設けて気楽な意見交換の機会を設ける、などの改善を進めたい。 ・「大学教員インターンシップ」については、①到達目標を明確にして博士支援推進室の大学院生用インターンシップの全体スキームのなかに位置づける、②理系学生の受け入れ先を拡充する、などの改善を進めたい。 ・プレFDプログラムを大学院共通科目のなかにどのように位置づけるか、それを誰が担当するのが本来的に望ましいかを、長期的視野に立って検討する必要がある。
成果物 ／参考資料	【資料】近田政博（2023）「神戸大学の大学教員準備講座：後発型大学の挑戦」大学教育学会ラウンドテーブル「プレFD再検証：研究大学の教育系センターにおける運営上の課題と試行錯誤」2023年6月3日（座長：近田政博） 【資料】大山牧子（2024）「神戸大学における他大学インターンシップのプレFD」大阪大学FFP10周年シンポジウム、2024年2月22日 【資料】2023年度大学教員インターンシップ実施報告書（4件）

【大学教育研究センター 大学教育研究部門 課題③】 学生の深い学びを促す教育学習支援コンテンツの開発



令和5年度
計画

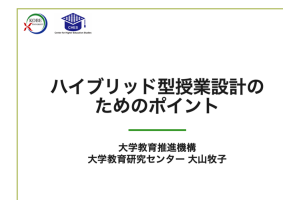
・神戸大学の新任教員に向けた、教育構成員として関与するための新任教員FD研修コンテンツの開発と普及を行う。また、ポストコロナの教育に向けて、BEEF+を用いた授業デザインのモデルの開発と普及や、ハイブリッド授業に関わる教育支援（FD）コンテンツの開発とセミナーを開催する。

令和5年度
成果

・神戸大学の新任教員に向けて、神戸大学の教育に関わる教学マネジメントや授業設計といったマクロからミクロを網羅するeラーニング動画教材7本を作成、提供した。合計で365回の視聴数があった。

・ポストコロナにおいて、オンラインを活用した授業の具体的な授業設計の提案として、「**ハイブリッド型授業設計のためのポイント**」のFDを実施した。また、その内容は紀要にも収録されている。

・FD研修のアンケートは、回答者12名中全員が「満足している」「どちらかといえば満足している」と答えており、**研修会が概ね有用であったことが示された。**



今後の課題

・ハイブリッド授業や、効果的な授業設計に関わる教育支援（FD）オンラインコンテンツを開発する。
・神戸大学における深い学習を促すための優れた教育資源を発掘するために、グッドプラクティスの抽出とそれに基づいた事例集を開発する

成果物
／参考資料

【教材】・大山牧子(2023)「ハイブリッド型授業設計のためのポイント」『神戸大学FD研修会資料』
・『神戸大学新任教員対象eラーニング研修動画』
【アンケート結果】大学教育推進機構主催FDアンケート結果
【論文】大山牧子(2023)「授業評価アンケートの自由記述結果を踏まえたオンラインを活用した授業設計のポイント」『大学教育研究』

【大学教育研究センター 教学IR研究部門 課題①】

教学IR推進体制の構築



令和5年度 計画

- ・ 教学IR関係者を対象として、他大学の教学IR担当者から、その実情にふみこんで情報提供いただく機会を設ける。
- ・ 実際にデータウェアハウス（KDWH）に格納されたデータ等进行分析するプロセスを通じて、教学IR推進体制について具体的に検討する

令和5年度 成果

- ・ 11月7日に大阪大学の村上正行教授を招聘して、大阪大学における教育・学習データの活用・学習成果の可視化に関する取組の現状について情報提供いただき、本学における教学IRについて考える上での示唆を得た。
- ・ KDWHに格納されている教務データと同等のデータを用いて、特定の科目群の成績に基づく直接評価と学生アンケートに基づく間接評価の結果を紐づけた分析を行い、そのプロセスにおける課題を明らかにした。

今後の課題

- ・ KDWHに格納されたデータを引き出すためには、情報処理に長けた者の存在が不可欠であり、また、そのデータを用いて分析を行うためにはデータの紐づけ等にかかなりの時間を要するため、マンパワーが必要である。

成果物 ／参考資料

- 【資料】村上正行「大阪大学における教育・学習データの活用・学習成果の可視化に関する取組の現状」
- 【論文】葛城浩一（2024）「ディプロマ・ポリシーで定める能力をどのように評価するかー直接評価と間接評価の関係性に着目して」『大学教育研究』第32号、pp.61-80.
- 【書籍】大山牧子（印刷中）「第3章 評価と改善の好循環を創り出すためのティップス：5つの指針にそくして」『大学の質保証における教育プログラムの評価と改善ーIR機能を活用した好循環づくりのティップスー』東北大学出版会